黒いトロトロ石器と白いトロトロ石器

～九州東南部から南部におけるトロトロ石器の研究ノート～

藤木　聡
（宮崎県埋蔵文化財センター）

トロトロ石器は、参考文献に挙げたこれまでの調査研究の成果によれば、平面形が石鏃に似ているものの、その先端が丸みを帯び、両側縁と脚部の境には抉り等があって、脚部が左右非対称となることの多い石器である。異形局部磨製石器・異形部分磨製石器とも呼ばれるとおり、器面に部分的に摩滅や擦痕が認められることが多く、強い摩滅具合から“トロトロ”とした見た目や触感となるものも少なくない。チャートほか白色を基調とする石材が多用され、黒色系で横方向の縞模様が入るものが特徴的にみられる。縄文時代早期中葉の押型文土器やそれ以降の後葉までの土器に伴い、日本海側では富山県域、太平洋側では千葉・茨城県域あたりを東限に、中部・近畿・中四国そして九州本土一円に分布し、その南限は種子島にある。用途・機能については数多くの議論があり、近年では山の神信仰のような、あるいは狩猟儀礼にかかる祭祀等との関係が言われている。

宮崎県域出土のトロトロ石器については、九州縄文研究会において縄文時代の精神性に関する遺物の１つとして集成され（九州縄文研究会・南九州縄文研究会 2012）、同誌上において日高優子により、宮崎県域では「黒曜石や質のおとる黒色系チャート、その他の暗色系石材も過半数以上使用されており、必ずしも白色系や黒色の縞模様を伴うものではない」こと、さらに「形態の粗雑さ、石材選択性の他地域との差異から、概念そのものが形骸化していた可能性がある」と指摘された（日高 2012）。これは、白色系石材の多用や縞模様を伴うという他地域で一般的なトロトロ石器の姿を念頭に置いた発言であり、資料の増加した今日でも変更を要しない重要な指摘である。

本稿は、未報告で今回が初出となるトロトロ石器も加え最新集成を公開し、日高優子の指摘を追認しつつ宮崎県域出土のトロトロ石器の特徴を抽出するものである。特に、黒いトロトロ石器が存在する意味や派生する問題についていくつか言及する。

1　宮崎県域出土トロトロ石器の特徴について

宮崎県域におけるトロトロ石器発見の歴史をひもとくと、1892 年に若林勝邦により報告された「日向國西諸縣郡須木村ヨリ發見」の石鏃（「此形状ヲナス石鏃ハ武蔵、備中ヨリモ發見セリ」と併記あり）がそのはじまりである（図 4-78）。現物確認はできていないものの、実測図のシルエットはほぼ間違いなくトロトロ石器のものとみてよい。管見では、これが学界に初めて紹介されたトロトロ石器であり、翌年の「本邦發見石鏃形状の分類」（八木 1893）にも石鏃分類の１つとして同図が掲載され、当時は、変わった形態の石鏃の一種という認識であった（町田 2020）。

この小林市須木発見のトロトロ石器は、岡本東三による鹿児島から茨城までの 57 遺跡 101 例に及ぶトロトロ石器全国集成にも、宮崎県内唯一の出土例として取上げられた（岡本 1983）。そして、岡本による集成とほぼ同時期に、宮崎県内では、梅ノ木原遺跡採集の縄文時代の石鏃としてトロトロ石器の写真が掲載され（高千穂町教育委員会 1983）、発掘調査によっても 1984 年２・３月調査の瀬戸口遺跡や 1984 年５～７月調査の芳ヶ迫第３遺跡においてトロトロ石器が相次いで出土した（田野町教育委員会 1985,1986・新富町教育委員会 1986）。

瀬戸口遺跡例については、発掘調査報告書中の日高孝治による考察が当時の認識を端的に示すこ

とから、やや長くなるが引用すると「特徴的な所では通称“トロトロ石器”と呼ばれる異形局部磨製石器の出土があげられる。この種の石器は近年岡本東三氏により分類等が行われているが、それによると西日本を中心に出土しており主に押型文土器と共伴する例が多く、石材にはチャートが多く使用されているといわれ、本遺跡の例も同様に押型文土器群に伴うものであると言える。また本遺跡出土のものは岡本氏分類のⅠc類（16）とⅡc類（17）に相当するものであり、県内では発掘調査の出土品としては初めてであり貴重な資料である」（新富町教育委員会 1986 - p.167、※ 16 は本稿の図 3-35、17 は図 3-34）。また、芳ヶ迫第 3 遺跡例（図 4-74）は、調査者の寺師雄二により「黒曜石製の異形石器が 1 点出土している。厚めの剥片を利用し、頭部は方形状を呈し 3 つの刃部は入念な刃潰し加工が施され、脚部も両側辺と基部から U 字状の抉りが施されている」（田野町教育委員会 1985-p.13）とされた。本例は、宮崎県域で最初に出土した桑ノ木津留産黒曜石製すなわち黒いトロトロ石器となる。宮崎県域では、1980 年代前半から黒いトロトロ石器と白いトロトロ石器がほぼ同時に出土していた点は、現在の宮崎県域における資料状況を暗に示しているかのようである。

その後も、トロトロ石器の出土例が追加され、その多くは、縄文時代早期の包含層から他遺物とともに 1 ～ 2 点のトロトロ石器が出土するというものであった。中には、共時性の検討は要するものの、清武上猪ノ原遺跡第 5 地区や駄小屋遺跡で各 12 点、車坂第 3 遺跡そして白ヶ野第 2・第 3 遺跡で各 7 点といった、トロトロ石器が多数出土する遺跡も登場した。また、上平遺跡において、出土石器約 17,000 点中で腰岳産黒曜石製石器はトロトロ石器 1 点のみであったことから、このトロトロ石器は製品となった状態で搬入されたと評価された（赤崎 2022 ほか）。

一方で、トロトロ石器の年代について、出土層位の上下や、土器型式の平面分布の重複から導かれるような発掘事例はあまりない。その中で、坂元遺跡では 8,310 ± 40BP の放射性炭素年代を持つ集石遺構から押型文土器とともにトロトロ石器が出土し、墓や炉穴等でないやや不確実な共伴状況ながらも、1 つの年代的定点としてよい（秋成 2015）。また、押型文土器主体の上の原遺跡や宮地遺跡 1 区等から出土したほか、萩ヶ久保第 1 遺跡では桑ノ丸式土器の分布と重複してトロトロ石器が出土している。こういったいくつかの事例と、他地域での年代観とを考え合わせると、宮崎県域出土のトロトロ石器の年代について、押型文土器から塞ノ神式土器期（縄文時代早期中葉から後葉）であると言えそうである。

そして今回、九州縄文研究会での集成（九州縄文研究会・南九州縄文研究会 2012）以降、新たな出土例ならびに石鏃等の別器種として報告されていた中からトロトロ石器と改めて認識された資料等を加えた結果、宮崎県域で出土したトロトロ石器は、合計 84 点（俵石第 1 遺跡報告でトロトロ石器とされた打製石鏃は除外）となる（図 2 ～ 4・表 1）。また、トロトロ石器と形状が似ていて関連しそうな異形石器・全面研磨の石製品等についても集成した（図 5・6）。図 2 ～ 6 の実測図には、図 1 の模式図のように、脚部が下となるよう図の天地を入れ替えたものがある。

トロトロ石器の分類（図 1）については、先行研究を参考に、石鏃形と羊頭形のものに大別し、次いで、石鏃形のものについては、体部の平面形や最大幅の位置、先端の形状からⅠ～Ⅳに、体部・脚部間の側縁の抉りの有無や反りといった形状等からＡ～Ｃに分け、その組合せでⅠＡ～ⅣＣ類の 12 類型を設定した。羊頭形のものはⅤ類とした。石鏃形のⅡＣ・ⅢＣ類は一般的な打製石鏃に近い平面形となるものの、トロトロ石器と認定するにあたり、先端が尖鋭でなく意図的に丸みを持たせて仕上げられていること、器面に摩滅・擦痕がみられることを根拠とした。石材は、宮崎県域のトロトロ石器の特質を表す上で重要ポイントとなるため、実見の上で統一的な名称を与え、とくにチャートについては基調となる色や縦横に入る別色の縞や筋あるいは斑模様の入り方を特記した。このほか、表

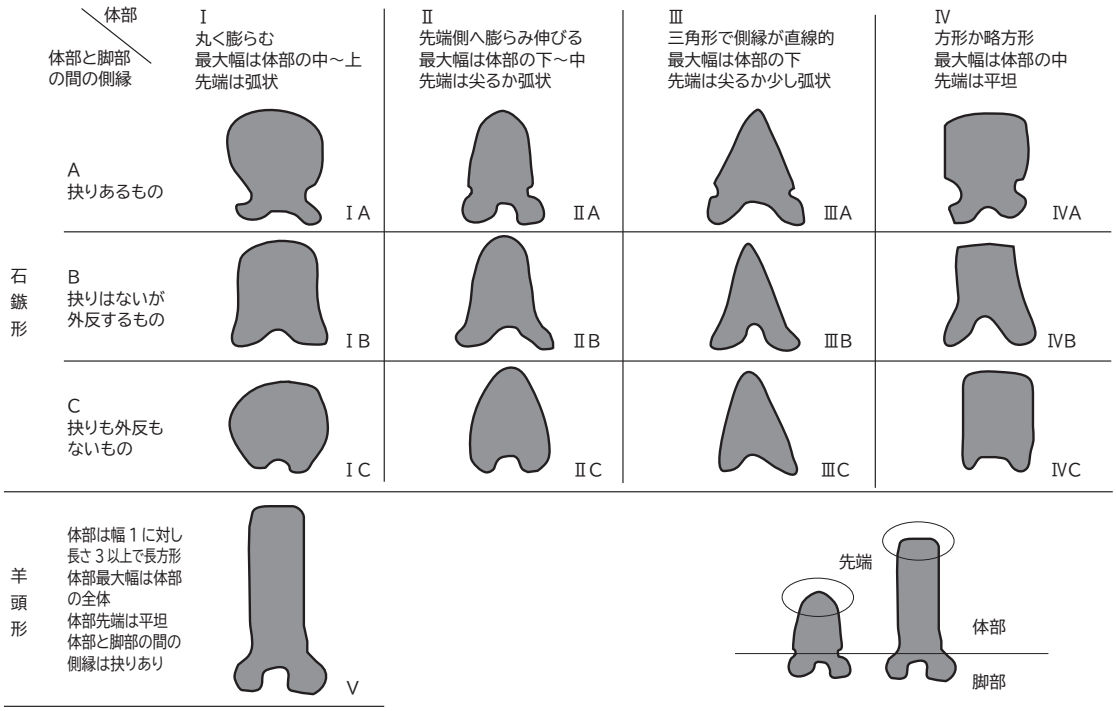


図１ トロトロ石器の分類模式図

1 の項目のうち、「No」は本稿での掲載番号であり、資料の初出報告での掲載番号・報告名称である「原報告 No」「原報告器種名」、九州縄文研究会集成時の掲載番号である「集成 No」を併記することで、初出報告や過去集成との対応関係がわかるようした。法量は初出報告からの転記を基本に、必要に応じて実物を採寸し、小数点第 1 位までで四捨五入した数値とした。

集成結果について、いくつか検討してみよう。

分類別でみると、今回集成された宮崎県域出土のトロトロ石器 84 点は、石鏃形のもの 82 点、羊頭形のもの 2 点からなる。類型別の点数は、ⅠＡ類 6 点･ⅠＣ類 2 点･ⅡＡ類 46 点･ⅡＢ類 5 点･ⅡＣ類 4 点・ⅢＡ類 7 点・ⅢＢ類 2 点・ⅢＣ類 2 点・ⅣＡ類 1 点・ⅣＢ類 2 点・Ⅴ類 2 点・石鏃形の中で欠損により細別不明 5 点となる。ⅠＢ・ⅣＣ類は、該当するものが無い。石鏃形では、82 点中 46 点とⅡＡ類が最多数（約 56%）となり（図 10）、次いでⅢＡ類、ⅠＡ類の順に多い。体部と脚部の間の両側縁に抉りを持つもの（ⅠＡ～ⅠＤ類）は、石鏃形 82 点中 59 点（約 72%）と多く、体部と脚部の間の両側縁に抉りを持つ点が石鏃形のトロトロ石器の平面形を特徴づける要素となっている。

石材について特にその色調に着目すると、83 点のうち、白色系石材は 68 点（約 82%）あり、白色チャート 51 点（白のみ 12 点・黒縞有 16 点・褐縞有 1 点・黒筋有 3 点・白筋有 1 点・横筋有 1 点・黒縦縞有 2 点・黒斑有 9 点・灰斑有 5 点・茶褐斑有 1 点）・灰白チャート 11 点（灰白のみ 3 点・黒縞有 4 点・黒筋有 1 点・黒縦筋有 1 点・黒斑有 2 点）・灰緑チャート（黒筋有）1 点・姫島産黒曜石 2 点・白黒半々チャート 1 点・白半透明斑チャート 1 点・無色透明水晶 1 点の内訳となる。黒色系石材は 15 点（約18%）で、腰岳産黒曜石 5 点・桑ノ木津留産黒曜石 4 点・黒チャート（黒のみ）2 点・灰黒チャート（白縞有）1 点・安山岩 1 点・針尾産黒曜石 1 点・黒色頁岩 1 点、そして現物確認できない若林 1892 年報告の 1 点が石材不明となる（図 10）。石材産地の位置関係からみると、黒色系石材のうちチャート・頁岩は在地産である一方で、腰岳産黒曜石や針尾産黒曜

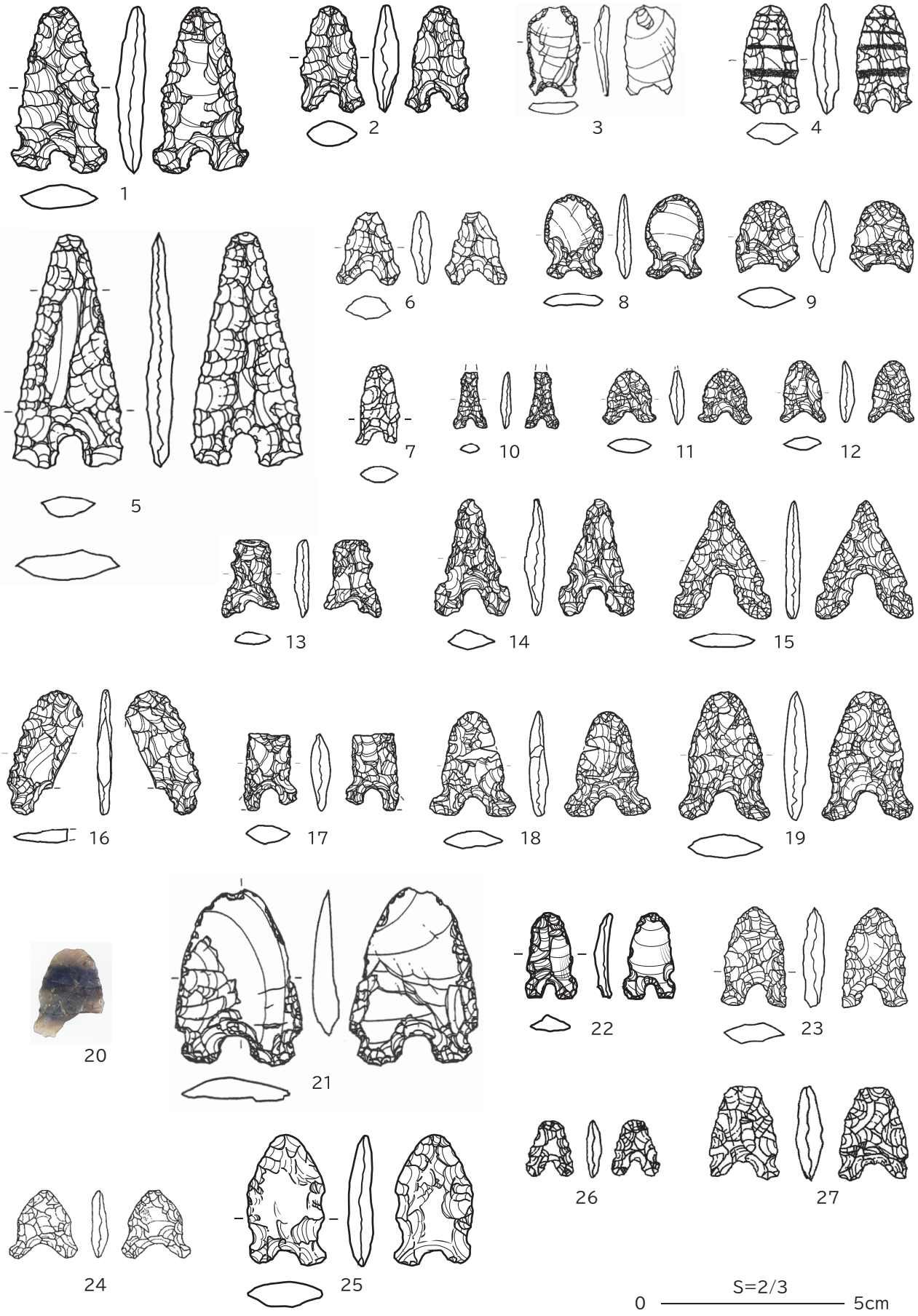


図２　宮崎県域出土のトロトロ石器（1）

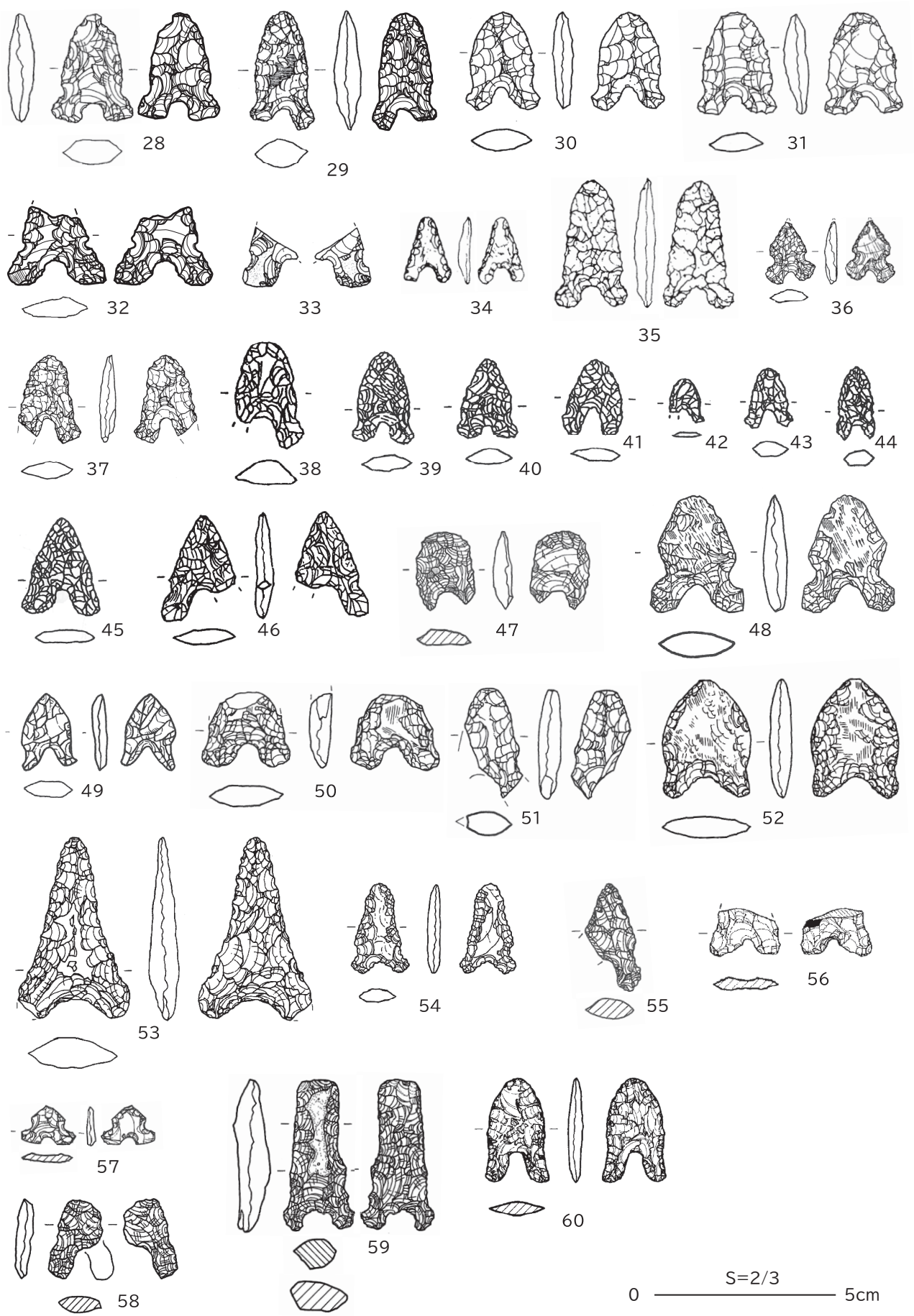


図３　宮崎県域出土のトロトロ石器（2）

図４　宮崎県域出土のトロトロ石器（3）

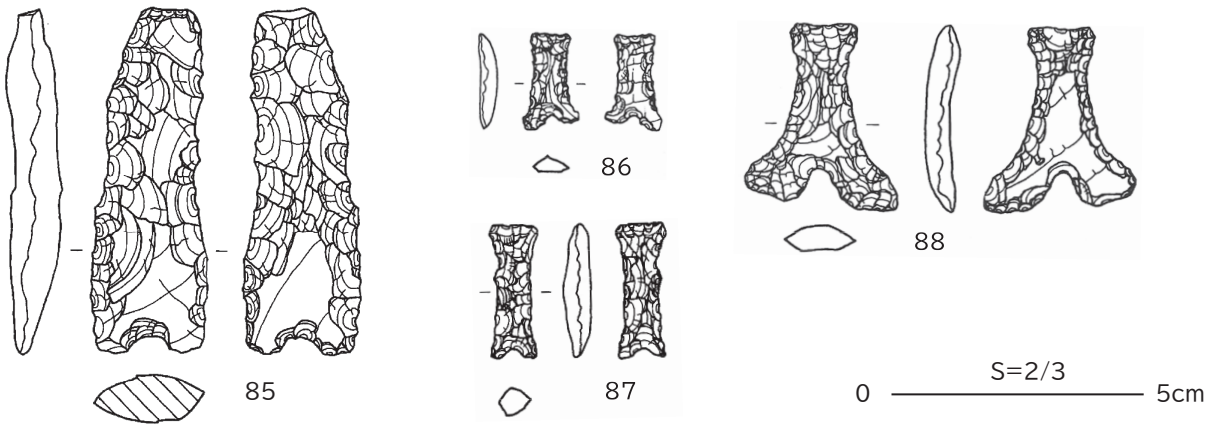


図５　宮崎県域出土のトロトロ石器関連の異形石器（1）

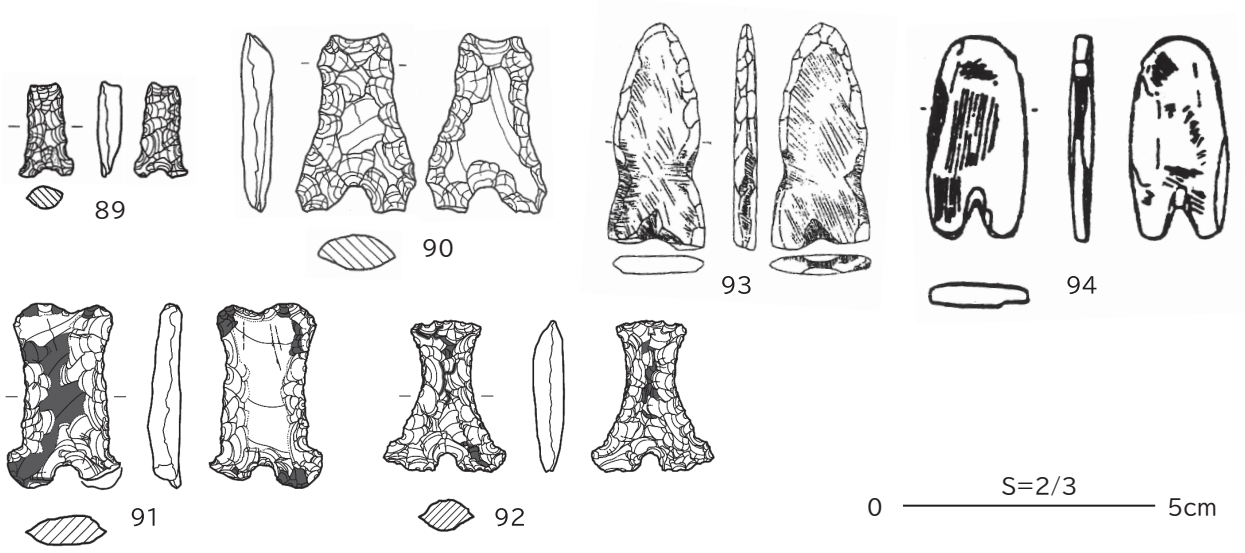


図６　宮崎県域出土のトロトロ石器関連の異形石器（2）・全面研磨石製品

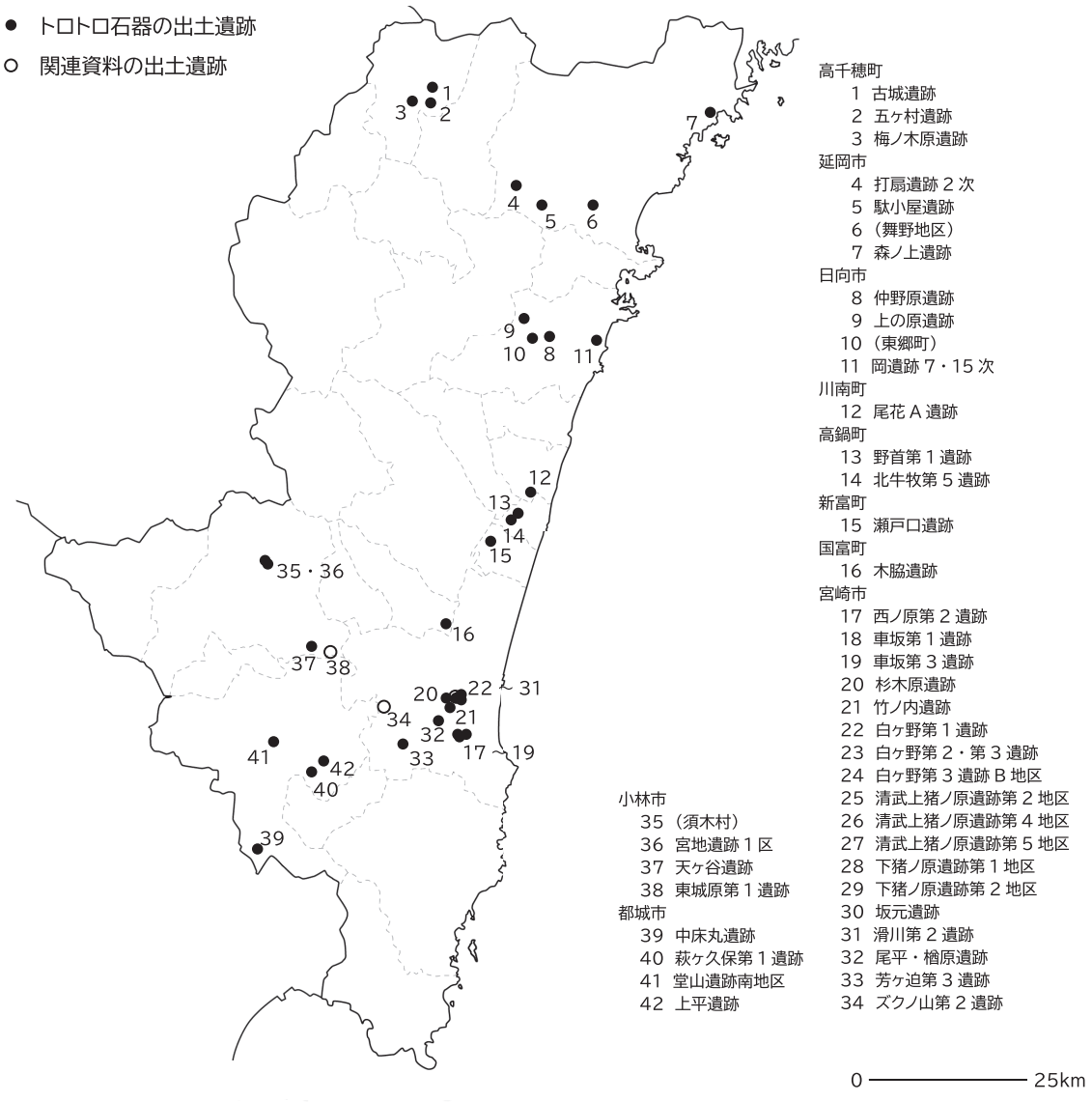
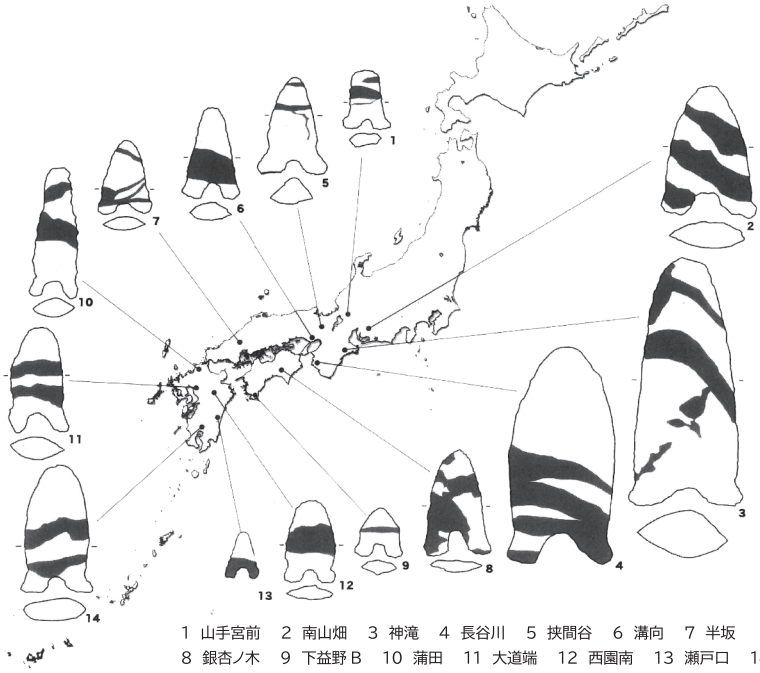


図７　宮崎県域におけるトロトロ石器および関連資料出土遺跡の分布



1 山手宮前　2 南山畑　3 神滝　4 長谷川　5 挟間谷　6 溝向　7 半坂
8 銀杏ノ木　9 下益野 B　10 蒲田　11 大道端　12 西園南　13 瀬戸口　14 上野原
※ 13 は本稿の図 3-34 に同じ

図８ 縞のあるトロトロ石器の分布（志賀 2003 より一部改変の上で転載）

A 清武上猪ノ原第５地区　B 車坂第３　C 五ヶ村　D・E 野首第１　F 芳ヶ迫第３　G 山ノ田（鹿児島県志布志市、左：腰岳 Ob・右：チャート）
H 仲野原　I 東郷町内　J 駄小屋　K 岡７次　L 尾花 A　M 清武上猪ノ原第２　※山ノ田の腰岳Ob製は本稿の図 11-10 に同じ

図９ 九州東南部から南部の白いトロトロ石器・黒いトロトロ石器ならびに関連する異形石器

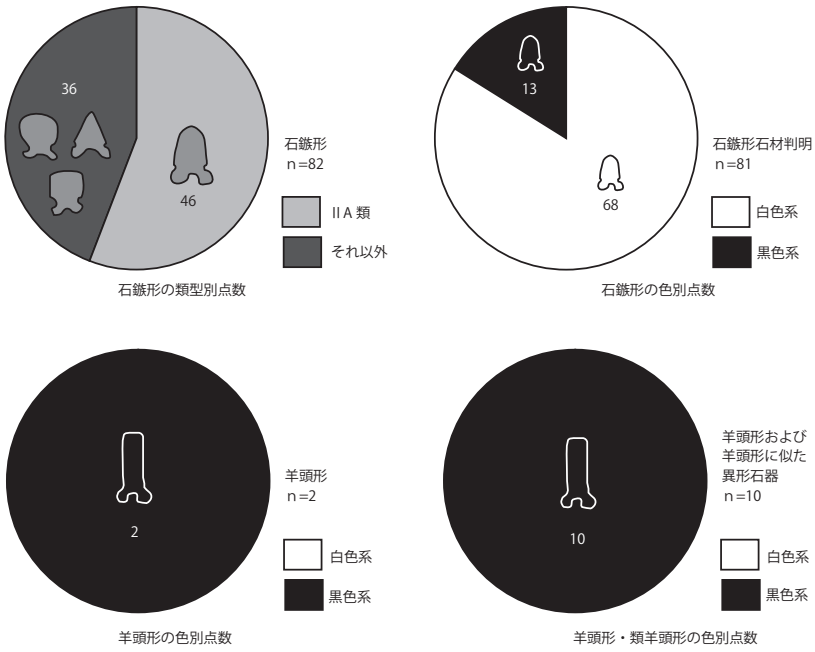


図 10　宮崎県域におけるトロトロ石器の類型・色別の数量比

石といった遠隔地の良質石材がみられる。白色系石材は、チャート･石英等が基本的に在地産であり、わずかに姫島産黒曜石は遠隔地石材となる。

トロトロ石器の石材やその色調の上で注目される点を箇条書きすると、①石鏃形（Ⅰ～Ⅳ類）で石材のわかる 81 点のうち、白色系 68・黒色系 13 点であり、黒色系の石材を用いたトロトロ石器が石鏃形全体の 2 割弱と一定数を占めている、②羊頭形（Ⅴ類）2 点は宮崎平野の船引台地上の遺跡群でのみ出土し、黒色系石材（腰岳産黒曜石 1 点・桑ノ木津留産黒曜石 1 点）のみである、③羊頭形（Ⅴ類）に似た異形石器 8 点もまた船引台地上の遺跡群でのみ出土し、いずれも黒色系石材である、④石材に縞模様（基調色と異なる色による縞、節理等による筋）の入る石鏃形 25 点は、全て白色系基調に黒色系の縞となるもので、縞の方向別では横方向 22 点・縦方向 3 点（およそ横方向 9：縦方向 1）となる。

石鏃形のトロトロ石器の色について、他地域と共通して白色系基調のものがあり、図 8 のような白色系基調に横方向（トロトロ石器の長軸に対して直交方向）で黒色系の縞の入るものがある点は、これまで多くの他地域で見出されてきたトロトロ石器の特徴とよく共通する。一方で、他地域では一般的でない、石鏃形のうち黒色系石材のものが 2 割みられる点や、縦縞の入るものが少数ながらあること、黒基調に白色系の横縞の入るものがあること、白色系多用の石鏃形と黒色系多用の羊頭形とに分かれる点は、宮崎県域出土のトロトロ石器の色に関する特徴といえる。

トロトロ石器の形について、石鏃形では、体部が先端側に膨らみつつ伸び、体部の最大幅が体部の下から中ほどにあって、先端は尖るか弧状となり、体部と脚部の間の側縁には抉りが入るもの（本稿でいうⅡ A 類）が 6 割近くを占めている。

この最多数のⅡ A 類の 1 つである清武上猪ノ原遺跡第 5 地点出土例（図 4-62）は、長さ 1.9cm と他と比べて小さく、真っ黒な色調の頁岩を用いている。チャートや黒曜石でなく頁岩という軟質で細かな成形により適した石材を用い、丁寧な研磨によって先端のカーブや両側縁の抉りを実現している点を積極的に評価すれば、製作者が理想とするトロトロ石器の究極的な姿が具現化されたものとも考えられる。

2　九州東南部から南部における黒いトロトロ石器の分布について

トロトロ石器のうち、腰岳産黒曜石製で石鏃形のものが、岡遺跡７次（日向市）・尾花Ａ遺跡（川南町）・野首第１遺跡（高鍋町）・上平遺跡（都城市）から、羊頭形のものが清武上猪ノ原遺跡第５地区（宮崎市）からそれぞれ出土している。石材同定は、蛍光Ｘ線分析による上平遺跡（赤崎2022）以外は肉眼観察によるため、将来的には悉皆的科学分析を要するものの、ひとまず腰岳産黒曜石製トロトロ石器について、宮崎平野を中心に、都城盆地や耳川・塩見川下流域に分布することを確認できた。

また、黒色系石材製トロトロ石器には、針尾産黒曜石のものが清武上猪ノ原遺跡第２地区（宮崎市）、安山岩製のものが白ヶ野第２・第３遺跡（宮崎市）、黒チャート製のものが下猪ノ原遺跡第１地区（宮崎市）・清武上猪ノ原遺跡第２地区（同上）、灰黒チャート製のものが上平遺跡（都城市）、桑ノ木津留産黒曜石製のものが木脇遺跡（国富町）・坂元遺跡（宮崎市）・清武上猪ノ原遺跡第２地区（同上）・芳ヶ迫第３遺跡（同上）、黒色頁岩のものが清武上猪ノ原遺跡第５地区（宮崎市）でそれぞれ出土を確認できた。

こういった腰岳産黒曜石製ほか石鏃形の黒いトロトロ石器について、各発掘調査報告書中の記載や図版ならびに九州縄文研究会や各地での集成等の石材記載（寒川 2013 ほか）も参考に、地域を広げて検索を試みた（図 11）。

その結果、管見では、白川流域の瀬田裏遺跡や瀬田裏狐塚遺跡（ともに熊本県大津町）、球磨盆地の灰塚遺跡（同県あさぎり町）、長ヶ原遺跡（鹿児島県霧島市）、山ノ田遺跡（同県志布志市）で黒色の黒曜石製トロトロ石器が出土しているほか、瀬戸頭Ａ遺跡（同県日置市）・打馬平原遺跡（同県鹿屋市）・横堀遺跡（同県曽於市）において淀姫産黒曜石や安山岩等の黒色系トロトロ石器の出土を確認できた（有明町教育委員会 2005・鹿児島県教育委員会 1978・鹿児島県立埋蔵文化財センター 2005・鹿屋市教育委員会 1988・熊本県教育委員会 2000，2014・瀬田裏遺跡調査団 1992・松山町教育委員会 2005）。中でも、瀬田裏遺跡では 22 点ものトロトロ石器が出土し、このうち 16 点が全長 11.8 ㎝・幅 4.3 ㎝と長大なものを含むチャート製で、残る６点が黒曜石製という、やや突出した存在である（瀬田裏遺跡調査団 1992）。

この黒いトロトロ石器の分布の広がりについて、その境界付近について確認しておくと、現状でトロトロ石器分布の南限である種子島で出土したトロトロ石器３点は何れも白色系チャート製であり（西之表市教育委員会 2022）、黒曜石等を用いた黒いトロトロ石器は出土していない。また、宮崎県域でも北部となる五ヶ瀬川流域やその上流域である高千穂盆地等におけるトロトロ石器 21 点は全て白色系チャート製であり、さらに、同地域に近い大分県佐伯市所在の森の木遺跡（大分県教育庁埋蔵文化財センター 2016）でも、トロトロ石器３点のいずれもが白色系チャート製であった。こういった分布上の境界の様相には今後も十分に注意を払うとして、ひとまず、九州の東南部から南部においては、白いトロトロ石器に加え、黒いトロトロ石器も分布することを強調しておきたい。

腰岳産黒曜石製ほか黒いトロトロ石器の存在は、白色系チャート製のものが大勢を占める中で埋没し、研究の上でもトロトロ石器＝白色を基調とした点がことさらに強調され、これまで積極的に取り上げられることは少なかった。しかし、石材や色調が黒い点以外は白色系のものと共通した形状・仕上げとなっており、色の相違以外は排他的な関係ではない。さらに、これまでのトロトロ石器をめぐる議論の多くが、トロトロ石器の大半が「白い」色調を指向したものであること、その白色系指向が広域に共通していることを前提とし、白い石材に規制的にこだわる意味や効果をはじめトロトロ石器の性格

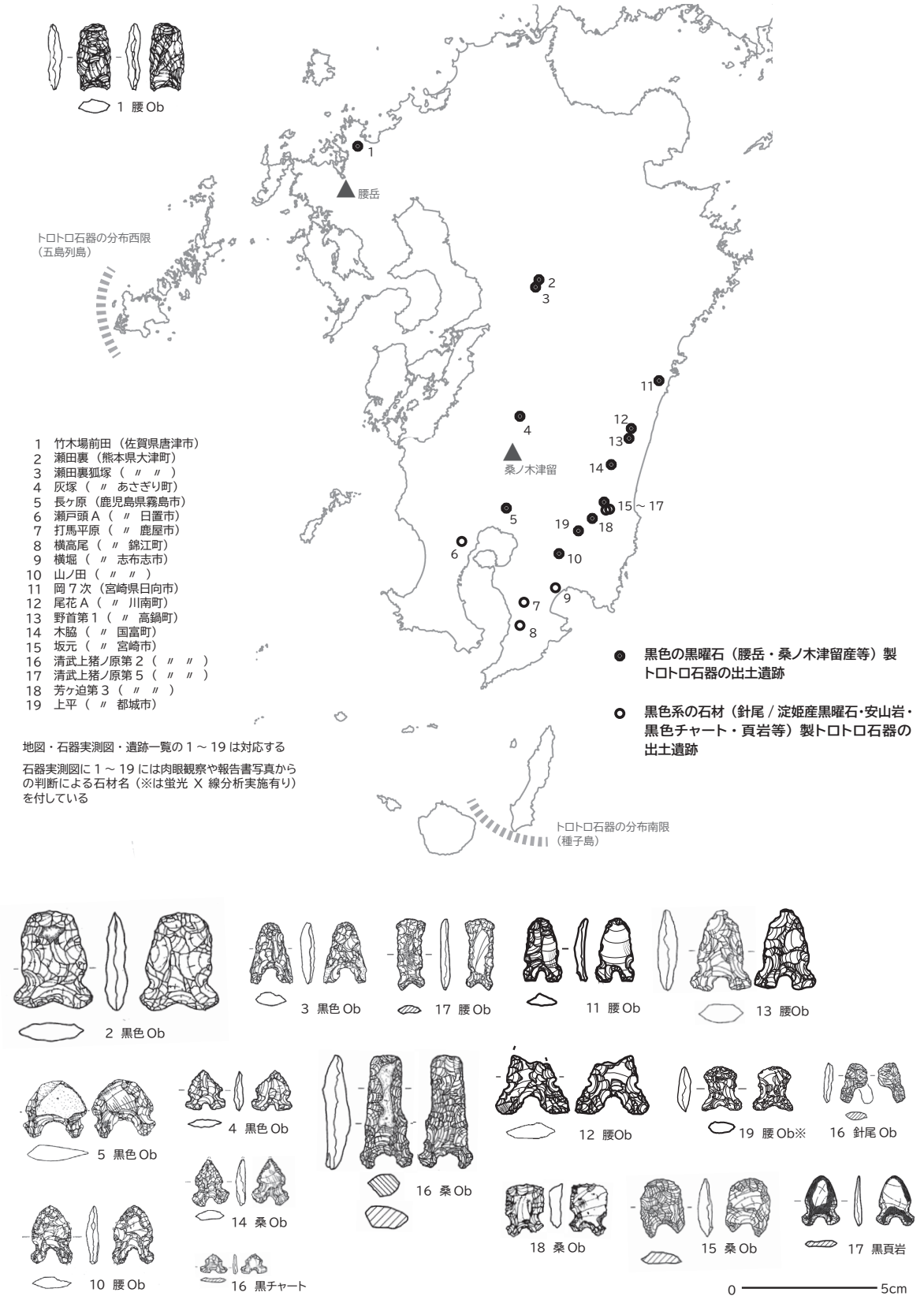


図 11　九州地域における黒曜石ほか「黒色指向」の主なトロトロ石器分布図

等が論じられてきただけに、九州の東南部から南部における「黒い」トロトロ石器の存在は、もっと注意される必要がある。

なお、今回取り上げた、トロトロ石器と関係しそうな形状の類似した異形石器について、いずれも腰岳産黒曜石ほか黒色系石材が用いられていた点は、黒色系石材を用いたトロトロ石器と年代や用途・機能等のつながりと評価することも可能かもしれない。鹿児島県域では、トロトロ石器と異形石器の盛行時期が異なるとあきらかにされており、トロトロ石器は押型文土器、桑ノ丸式～妙見・天道ヶ尾式土器、塞ノ神式土器との共伴が多く（寒川 2013）、異形石器は平栫式土器・塞ノ神式土器等の伴う早期後葉に多く、壺形土器や耳栓等の遺物に象徴されるような精神文化の発達とともに異形石器の盛行があるとされる（新東 2011）。これまでも指摘されてきたとおり（麻柄 2006・林 2009 ほか）、トロトロ石器の評価等にあたっては異形石器との関係性にも目配りを要する。

3　腰岳産黒曜石製トロトロ石器はどこで製作されたのか

福岡県域出土のトロトロ石器を集成した林潤也は、剥片石器石材がほぼ黒曜石と安山岩で占められる石材環境の中で、トロトロ石器の石材がチャートに偏るという特異な石材選択に注目し、一部で赤褐色チャート等の在地石材を用いた例もあるため、慎重な検討を要するとしつつも、トロトロ石器自体が製品として広域に流通している可能性が高いとする（林 2009）。同様の流通は、サヌカイトや下呂石等を多用する中でトロトロ石器に白色を基調としたチャートを選択的に強い規則性でもって用いる近畿地方（田部 2002）でも当てはまろう。九州北部も近畿地方も、剥片石器石材に黒色系石材が多用される中で、トロトロ石器は白色系石材という対照的構造がある。

ただし、腰岳産黒曜石が代表的な有力石材として流通する福岡県域をはじめ九州北部にあって、腰岳産黒曜石製トロトロ石器が皆無というわけではない。上場台地に位置する竹木場前田遺跡例（図 11-1）は、押型文土器に伴出し、「黒曜石製で器長 2.4cm・幅 1.2cm と小形で、脚部には弱い抉りがあり、先端は U 字形に丸くなる。先端両面の稜線は研磨されたように潰れる」と報告されている（唐津市教育委員会 1996）。九州北部で一般的なチャート製トロトロ石器とは形態が異なるため、そもそもトロトロ石器なのかどうかから意見が分かれるかもしれない。私見では、報告所見どおり、先端形状や研磨等のあり方からトロトロ石器でよいと思われ、その存在自体は大いに注目されるものである。いずれにしても限定的な事例であって、腰岳産黒曜石製トロトロ石器が、腰岳の膝元である九州北部においてほぼみられない点は変わらない。腰岳にほど近い樽浦遺跡のトロトロ石器も白色系チャートであり、剥片石器石材に多い腰岳産黒曜石を用いてはいない（伊万里市教育委員会 1998）。

一方で、腰岳からみて遠隔地であり、かつチャートの原産地やそれが採集可能な範囲の中にある九州東南部から南部においては、チャート製トロトロ石器と腰岳産黒曜石製トロトロ石器の両者がみられる。中には、都城盆地の一画に位置する上平遺跡の腰岳産黒曜石製トロトロ石器のように、石器石材組成からみて搬入品と考えられるものもある。

ここで注意したいのは、この腰岳産黒曜石製トロトロ石器を、どこでだれが製作したのか答えがなく、対照的に九州北部で多用される、地元に産しない良質なチャートを用いたトロトロ石器を、どこでだれが製作したのかもまた答えがないという、一見、対照的であり、また矛盾したような石材利用となっている点である。

これまでのトロトロ石器をめぐる議論のとおり、優良なチャート原産地（採集可能地）が生活領域内にある場合は、自然に考えれば自己消費でよいとみられる一方で、自己消費を超えた製品の流通あるいは分配等が予見される地域が存在することは、集団間の関係性を知るうえで重要である（和田

表1　宮崎県域出土のトロトロ石器一覧表

No	遺跡名(採集地名)	市町村	分類	原報告No	原報告器種名	集成No	石材	長cm	幅cm	厚cm	重量g	文献
図2-1	梅ノ木谷遺跡	高千穂町	ⅡA	図版8-1	トロトロ石器	第13図2	チャート白(黒縞有)	4.5	2.6	0.7	7.5	高千穂町教委1983、図初出
図2-2	梅ノ木谷遺跡	高千穂町	ⅡA	-	-	-	チャート白(黒斑有)	2.9	1.7	0.7	2.9	初出
図2-3	古城遺跡	高千穂町	ⅠA	第76図515	異形石鏃	第13図3	チャート白(黒縞有)	2.5	1.4	0.4	1.2	県埋文セ2003a
図2-4	五ヶ村遺跡	高千穂町	ⅡA	第20図225	異形石鏃	第13図5	チャート灰白(黒縞有)	3.0	1.6	1.7	2.9	県埋文セ2003b
図2-5	五ヶ村遺跡	高千穂町	ⅢC	第20図232	異形石鏃	第13図6	チャート灰白(黒筋有)	6.3	3.0	0.7	12.3	県埋文セ2003b
図2-6	五ヶ村遺跡	高千穂町	ⅡB	第20図220	異形石鏃	第13図4	チャート白(黒斑有)	2.0	1.8	0.6	1.5	県埋文セ2003b
図2-7	打扇遺跡2次	延岡市	ⅡB	第6図11	-	-	チャート白	2.2	1.3	0.5	1.3	宮崎県教委1995
図2-8	駄小屋遺跡	延岡市	ⅠA	第71図573	異形石器(トロトロ石器)	-	チャート灰緑(黒筋有)	2.2	1.6	0.4	1.6	県埋文セ2014
図2-9	駄小屋遺跡	延岡市	ⅠC	第71図578	異形石器	-	チャート白(黒縞有)	2.0	1.7	0.6	2.0	県埋文セ2014
図2-10	駄小屋遺跡	延岡市	ⅢB	第71図577	異形石器	-	チャート白(黒斑有)	1.6	0.9	0.3	0.3	県埋文セ2014
図2-11	駄小屋遺跡	延岡市	ⅡA	第71図572	異形石器(トロトロ石器)	-	チャート白(黒縞有)	1.5	1.5	0.4	0.8	県埋文セ2014
図2-12	駄小屋遺跡	延岡市	ⅡA	第71図571	異形石器(トロトロ石器)	-	チャート白	1.7	1.3	0.4	0.7	県埋文セ2014
図2-13	駄小屋遺跡	延岡市	ⅣB	第71図584	異形石器	-	チャート白(灰斑有)	2.1	1.6	0.4	1.2	県埋文セ2014
図2-14	駄小屋遺跡	延岡市	ⅢA	第71図581	異形石器	-	チャート白(黒縦縞有)	3.2	2.1	0.5	2.3	県埋文セ2014
図2-15	駄小屋遺跡	延岡市	ⅢA	第71図582	異形石器	-	チャート白	3.3	2.7	0.4	2.5	県埋文セ2014
図2-16	駄小屋遺跡	延岡市	ⅡA	第71図585	異形石器	-	チャート灰白	3.4	2.1	0.4	2.3	県埋文セ2014
図2-17	駄小屋遺跡	延岡市	ⅣB	第71図583	異形石器	-	チャート白(黒斑有)	2.1	1.5	0.5	1.6	県埋文セ2014
図2-18	駄小屋遺跡	延岡市	ⅡA	第71図574	異形石器(トロトロ石器)	-	チャート白(黒縦縞有)	2.9	2.4	0.5	2.7	県埋文セ2014
図2-19	駄小屋遺跡	延岡市	ⅡA	第71図575	異形石器(トロトロ石器)	-	チャート白(黒縞有)	3.5	2.5	0.7	4.9	県埋文セ2014
図2-20	（舞野地区）	延岡市	ⅡA	-	トロトロ石器	-	チャート白(黒縞有)	2.3	1.7	0.6	-	柳田2003、写真初出
図2-21	森ノ上遺跡	延岡市	ⅡA	第55図276	トロトロ石器	第13図9	チャート白(黒縞有)	4.8	3.5	0.7	10.5	県埋文セ2011
図2-22	岡遺跡第7次	日向市	ⅡA	第51図146	トロトロ石器	-	腰岳産黒曜石	2.4	1.4	0.4	1.0	県埋文セ2012a
図2-23	岡遺跡第15次	日向市	ⅡA	第69図68	トロトロ石器	-	チャート白	2.7	1.7	0.5	2.4	県埋文セ2013
図2-24	仲野原遺跡	日向市	ⅡA	第44図279	トロトロ石器	第14図5	水晶(無色透明)	1.7	1.7	0.3	1.3	日向市教委2003
図2-25	（東郷町）	日向市	ⅡA	-	-	-	チャート白(黒筋有)	3.6	2.2	0.7	6.1	初出
図2-26	上の原遺跡	日向市	ⅡA	第11図27	トロトロ石器	-	チャート白(黒縞有)	1.5	1.3	0.4	0.6	日向市教委2017
図2-27	上の原遺跡	日向市	ⅡA	第11図28	トロトロ石器	-	チャート灰白(黒斑有)	2.6	1.9	0.7	3.0	日向市教委2017
図3-28	野首第1遺跡	高鍋町	ⅡA	第24図161	トロトロ石器	第14図14	腰岳産黒曜石	3.0	2.3	0.8	3.9	県埋文セ2007
図3-29	野首第1遺跡	高鍋町	ⅡA	第24図141	トロトロ石器	第15図6	チャート灰白(黒縞有)	3.3	1.8	0.8	3.7	県埋文セ2007
図3-30	北牛牧第5遺跡	高鍋町	ⅡA	第80図357	異形石鏃	第15図11	チャート白(横筋有)	2.6	2.0	0.6	2.9	県埋文セ2003c
図3-31	北牛牧第5遺跡	高鍋町	ⅡA	第80図358	異形石鏃	第15図10	チャート灰白(黒縞有)	2.7	2.2	0.7	3.6	県埋文セ2003c
図3-32	尾花A遺跡	川南町	－	第78図453	石鏃	-	腰岳産黒曜石	2.2	2.7	0.5	2.7	県埋文セ2009
図3-33	野首第1遺跡	高鍋町	－	第57図351	トロトロ石器	第14図12	チャート灰白	1.6	1.5	0.4	0.8	県埋文セ2004
図3-34	瀬戸口遺跡	新富町	ⅢC	第24図17	トロトロ石器	第15図14	チャート白(黒縞有)	1.7	1.3	0.3	0.7	新富町教委1986
図3-35	瀬戸口遺跡	新富町	ⅡA	第24図16	トロトロ石器	第15図13	チャート白(黒斑有)	3.5	2.0	0.5	3.6	新富町教委1986
図3-36	木脇遺跡	国富町	ⅡA	第131図470	異形石鏃	-	桑ノ木津留産黒曜石	1.7	1.4	0.3	0.6	県埋文セ2001
図3-37	木脇遺跡	国富町	ⅡB	第131図465	石鏃	-	チャート灰白(黒斑有)	2.4	1.7	0.3	1.3	県埋文セ2001
図3-38	車坂第1遺跡	宮崎市	ⅡA	第9図56	トロトロ石器	第17図9	チャート白(黒斑有)	2.9	1.8	0.6	2.9	宮崎市教委1997
図3-39	車坂第3遺跡	宮崎市	ⅡA	第51図281	トロトロ石器	第18図1	チャート白	2.9	2.0	0.6	2.8	宮崎市教委1997
図3-40	車坂第3遺跡	宮崎市	ⅡA	第51図283	トロトロ石器	第18図7	チャート白(黒縞有)	2.5	1.9	0.6	2.1	宮崎市教委1997
図3-41	車坂第3遺跡	宮崎市	ⅡC	第51図285	トロトロ石器	第18図2	チャート白(灰斑有)	2.4	1.9	0.5	1.5	宮崎市教委1997
図3-42	車坂第3遺跡	宮崎市	ⅡB	第51図287	トロトロ石器	第18図5	チャート白(黒筋有)	1.4	1.1	0.2	0.2	宮崎市教委1997
図3-43	車坂第3遺跡	宮崎市	ⅡA	第51図286	トロトロ石器	第18図3	チャート白(灰斑有)	1.9	1.6	0.5	1.0	宮崎市教委1997
図3-44	車坂第3遺跡	宮崎市	ⅡA	第51図282	トロトロ石器	第18図6	チャート白	2.3	1.2	0.6	1.3	宮崎市教委1997
図3-45	車坂第3遺跡	宮崎市	ⅢB	第51図284	トロトロ石器	第18図4	チャート白	3.1	2.6	0.5	2.7	宮崎市教委1997
図3-46	西ノ原第2遺跡	宮崎市	ⅢA	第30図10	打製石鏃	第17図8	チャート白(灰斑有)	2.8	2.0	0.5	1.8	宮崎市教委1992
図3-47	坂元遺跡	宮崎市	ⅠC	第22図5	異形石器	第18図18	桑ノ木津留産黒曜石	2.1	1.6	0.5	1.6	清武町教委2005
図3-48	竹ノ内遺跡	宮崎市	ⅡA	第25図6	トロトロ石器	第18図11	チャート白(白斑有)	3.1	2.5	0.6	4.1	県埋文セ2000b
図3-49	杉木原遺跡	宮崎市	ⅡA	第46図38	異形鏃	第18図14	チャート白(灰斑有)	2.0	1.5	0.4	0.9	県埋文セ2001a
図3-50	白ヶ野第2・第3遺跡	宮崎市	－	第135図1498	異形局部磨製石鏃	第16図5	チャート白(黒縞有)	2.1	2.4	0.6	3.1	県埋文セ2002a
図3-51	白ヶ野第2・第3遺跡	宮崎市	ⅡA	第135図1499	異形局部磨製石鏃	第16図9	チャート白(茶褐斑有)	3.1	1.4	0.7	2.7	県埋文セ2002a
図3-52	白ヶ野第2・第3遺跡	宮崎市	ⅡA	第31図507	異形局部磨製石鏃	第17図2	チャート白(黒縞有)	2.6	1.0	0.6	1.1	県埋文セ2002b
図3-53	白ヶ野第2・第3遺跡	宮崎市	ⅡC	第31図510	異形局部磨製石鏃	第17図5	安山岩	4.9	3.1	0.8	6.3	県埋文セ2002b
図3-54	白ヶ野第3遺跡B地区	宮崎市	ⅡA	第27図295	トロトロ石器	-	チャート白(黒縞有)	2.5	1.6	0.4	1.4	県埋文セ2000a
図3-55	下猪ノ原遺跡第1地区	宮崎市	ⅢA	第56図107	異形石器	第20図16	チャート黒	3.0	1.5	0.6	1.7	清武町教委2010
図3-56	下猪ノ原遺跡第2地区	宮崎市	－	第78図872	異形石器	第21図1	姫島産黒曜石	1.3	1.9	0.4	0.8	宮崎市教委2011
図3-57	清武上猪ノ原遺跡第2地区	宮崎市	ⅠA	第74図516	異形石器	第20図6	チャート黒	1.0	1.5	0.3	0.3	清武町教委2009
図3-58	清武上猪ノ原遺跡第2地区	宮崎市	ⅡA	第74図525	異形石器	第19図14	針尾産黒曜石	2.2	2.0	0.4	1.0	清武町教委2009
図3-59	清武上猪ノ原遺跡第2地区	宮崎市	Ⅴ	第74図523	異形石器	第19図13	桑ノ木津留産黒曜石	4.2	2.0	1.0	5.2	清武町教委2009
図3-60	清武上猪ノ原遺跡第4地区	宮崎市	ⅡA	第75図688	異形石器	第20図9	チャート白(黒斑有)	2.9	1.7	0.4	2.0	宮崎市教委2012
図4-61	清武上猪ノ原遺跡第5地区	宮崎市	ⅠA	第224図2091	異形石器(トロトロ石器)	-	チャート白(黒斑有)	1.9	1.4	0.4	0.8	宮崎市教委2018
図4-62	清武上猪ノ原遺跡第5地区	宮崎市	ⅡA	第224図2101	異形石器(トロトロ石器)	-	黒色頁岩	1.9	1.4	0.3	0.6	宮崎市教委2018
図4-63	清武上猪ノ原遺跡第5地区	宮崎市	ⅡB	第224図2097	異形石器(トロトロ石器)	-	チャート白(黒斑有)	2.5	2.3	0.5	2.2	宮崎市教委2018
図4-64	清武上猪ノ原遺跡第5地区	宮崎市	ⅡA	第224図2093	トロトロ石器	第20図14	チャート白(黒縞有)	3.2	2.6	1.9	5.7	宮崎市教委2018
図4-65	清武上猪ノ原遺跡第5地区	宮崎市	－	第224図2096	異形石器(トロトロ石器)	-	チャート灰白(黒縞有)	3.6	2.5	1.0	6.6	宮崎市教委2018
図4-66	清武上猪ノ原遺跡第5地区	宮崎市	ⅡA	第224図2094	異形石器(トロトロ石器)	-	チャート白	2.3	1.6	0.4	1.7	宮崎市教委2018
図4-67	清武上猪ノ原遺跡第5地区	宮崎市	ⅡA	第224図2092	異形石器(トロトロ石器)	-	チャート白	2.1	1.3	0.4	0.9	宮崎市教委2018
図4-68	清武上猪ノ原遺跡第5地区	宮崎市	ⅡC	第224図2098	異形石器(トロトロ石器)	-	チャート白(褐縞有)	2.0	1.3	0.5	0.9	宮崎市教委2018
図4-69	清武上猪ノ原遺跡第5地区	宮崎市	ⅢA	第224図2100	異形石器(トロトロ石器)	-	チャート白	1.6	2.1	0.4	0.7	宮崎市教委2018
図4-70	清武上猪ノ原遺跡第5地区	宮崎市	ⅡA	第224図2099	異形石器(トロトロ石器)	-	チャート白(黒縞有)	2.4	1.6	0.7	2.4	宮崎市教委2018
図4-71	清武上猪ノ原遺跡第5地区	宮崎市	ⅢA	第224図2095	異形石器(トロトロ石器)	-	チャート白・黒半々	2.4	1.8	0.4	1.3	宮崎市教委2018
図4-72	清武上猪ノ原遺跡第5地区	宮崎市	Ⅴ	第224図2104	異形石器	-	腰岳産黒曜石	2.7	1.1	0.4	0.8	宮崎市教委2018
図4-73	尾平・楢原遺跡	宮崎市	ⅡA	第12図48	トロトロ石器	第23図1	チャート灰白(黒縦筋有)	2.1	1.6	0.4	1.1	県埋文セ1997
図4-74	芳ヶ迫第3遺跡	宮崎市	ⅣA	第45図42	異形石器	第23図4	桑ノ木津留産黒曜石	2.0	1.5	0.5	1.4	田野町教委1986
図4-75	天ヶ谷遺跡	小林市	ⅢA	Fig.41-14	異形石器	-	姫島産黒曜石	2.6	1.8	0.5	-	野尻町教委1992
図4-76	天ヶ谷遺跡	小林市	ⅡA	Fig.40-11	石鏃	-	チャート白(黒縞有)	2.4	2.3	0.5	-	野尻町教委1992
図4-77	宮地遺跡1区	小林市	ⅡA	図2-9-56	トロトロ石器	第24図7	チャート白	2.0	1.4	0.3	0.7	小林市教委2011
図4-78	（須木村）	小林市	ⅠA	-	石鏃	-	-	-	-	-	-	若林1892
図4-79	中床丸遺跡	都城市	ⅡA	第15図33	異形石器(トロトロ石器)	-	チャート白(黒筋有)	2.2	1.6	0.4	1.3	県埋文セ2016
図4-80	中床丸遺跡	都城市	ⅡA	第15図32	異形石器(トロトロ石器)	-	チャート白	2.2	1.6	0.5	1.2	県埋文セ2016
図4-81	堂山遺跡南地区	都城市	ⅡA	図16	-	第24図5	チャート灰白	2.3	2.1	0.7	3.0	都城市2006
図4-82	萩ヶ久保第1遺跡	都城市	ⅡA	第24図153	異形石器(トロトロ石器)	第24図3	チャート白・半透明斑	1.9	1.2	0.3	0.6	都城市教委2010
図4-83	上平遺跡	都城市	ⅠA	第166図715	異形石器(トロトロ石器)	-	腰岳産黒曜石	1.6	1.5	0.5	1.0	県埋文セ2023
図4-84	上平遺跡	都城市	ⅡC	第166図714	異形石器(トロトロ石器)	-	チャート灰黒(白縞有)	1.7	1.5	0.3	0.8	県埋文セ2023
関連資料												
図5-85	白ヶ野第1遺跡	宮崎市		第26図47	異形石器	第17図6	安山岩	6.7	2.3	1.0	15.5	清武町教委2004
図5-86	白ヶ野第2・第3遺跡	宮崎市		第135図1493	異形石器	第16図3	青灰色黒曜石	1.9	1.1	0.3	0.6	県埋文セ2002a
図5-87	白ヶ野第2・第3遺跡	宮崎市		第31図505	異形石器	第17図1	チャート灰黒	3.3	2.4	0.6	5.8	県埋文セ2002b
図5-88	白ヶ野第2・第3遺跡	宮崎市		第128図1275	異形石器	第16図6	チャート灰黒	3.7	3.0	0.6	4.4	県埋文セ2002a
図6-89	清武上猪ノ原遺跡第2地区	宮崎市		第74図524	異形石器	第19図11	桑ノ木津留産黒曜石	1.9	1.1	0.5	0.7	清武町教委2009
図6-90	清武上猪ノ原遺跡第2地区	宮崎市		第74図526	異形石器	第20図1	砂岩	3.5	2.4	0.7	4.8	清武町教委2009
図6-91	清武上猪ノ原遺跡第5地区	宮崎市		第224図2103	異形石器	-	腰岳産黒曜石	3.7	2.3	0.7	5.0	宮崎市教委2018
図6-92	清武上猪ノ原遺跡第5地区	宮崎市		第224図2102	異形石器	-	チャート灰黒	3.0	2.5	0.6	3.5	宮崎市教委2018
図6-93	ズクノ山第2遺跡	宮崎市		第55図530	用途不明石器	第23図6	頁岩	4.4	1.9	0.5	-	田野町教委2002
図6-94	東城原第1遺跡	小林市		第5図8	異形石器	第24図9	頁岩	4.0	1.9	0.5	-	野尻町教委1990

※ 文献の県埋文セ＝宮崎県埋蔵文化財センター

1989）一方で、資料の増加した今日にあっても製作遺跡の特定ができていない現状が続いていて議論が深化していないのである（町田 2020）。

今後の議論の手がかりの１つとして、剥片石器石材としての腰岳産黒曜石をはじめ西北九州産石材の流入量の変遷等があるかもしれない。都城盆地の保木島遺跡では、縄文時代早期後半になると、剥片石器石材として腰岳産黒曜石・多久産安山岩といった西北九州産石材の比率が高くなっており（宮崎県埋蔵文化財センター 2021）、同様の傾向が、九州南部の剥片石器石材について、土器の様相とも絡まりつつ、南九州産黒曜石等による在地系石材利用の早期前半から西北九州産石材の増加する早期後半という変遷が指摘されている（馬籠 1999）。腰岳産黒曜石製をはじめとする黒いトロトロ石器の登場は、こういった剥片石器石材から垣間見える人やモノの動きと相関して捉えられる可能性もあろう。

また、上の対照的な状況からは、ごくごく単純化した言い方をすれば、腰岳産黒曜石製トロトロ石器は、九州北部での生産でなく、たとえば瀬田裏遺跡周辺で製作されたものが九州東南部から南部へ供給され、反対に、九州東南部から南部で生産されたチャート製トロトロ石器が九州北部へ供給されたといった、一定の仮説を持った議論もあってよかろう。

4　おわりに

本研究ノートでは、日高優子の指摘（日高 2012）を追認しつつ、宮崎県域出土のトロトロ石器 84 点とその関係資料を検討し、①九州東南部から南部にかけて、白いトロトロ石器とともに黒いトロトロ石器があること、②黒い石材の中には九州東南部から南部で得られる桑ノ木津留産黒曜石や黒色頁岩・チャート等に加え、遠隔地石材となる腰岳産黒曜石もあること、③腰岳産黒曜石製トロトロ石器は遺跡によって搬入品とわかる例もあるが、どこで誰が製作したのか不明であることを主に確認してきた。とくに腰岳産黒曜石製ほか黒いトロトロ石器の存在は、トロトロ石器の性格付け等に一石を投じるものとして改めて強調するとともに、次の新たな議論の機会を待ちたい。

謝辞

今回の研究ノートは、志賀さんの「トロトロ石器の色と形」（2003 年）論文直後に、遠部慎さんから大量の文献が郵送されてくるとともに「黒いトロトロ石器のある宮崎にこそトロトロ石器の本質があるのではないか」と宿題をもらったことにはじまる。研究ノートを進める過程では、とくに林潤也さん・柳田裕三さんから九州北部各地や唐津市の竹木場前田遺跡の事例を、芝康次郎さんから腰岳周辺や腰岳産黒曜石利用に関する情報を教えていただいた。また、資料所蔵機関には見学の便宜を図っていただき、多くの方からご教示を得ることができた。ここに御名前を挙げて感謝の意を表したい（五十音順、個人・機関順、敬称略）。

秋成雅博・井上誠二・上床　真・緒方俊輔・遠部　慎・加覧淳一・乘畑光博・税田脩介・相美伊久雄・寒川朋枝・志賀智史・芝　康次郎・杉原敏之・太川裕晴・近沢恒典・留野優兵・中野和浩・林　潤也・日高優子・松本　茂・柳田裕三・呼子和友

えびの市教育委員会・小林市教育委員会・志布志市教育委員会・高千穂町教育委員会・日向市教育委員会・都城市教育委員会・宮崎市教育委員会

引用・参考文献

赤崎広志　2022「石器石材の肉眼鑑定と蛍光X線分析の連携－黒曜石製石器の分類における課題について－」『研究紀要』第７集、宮崎県埋蔵文化財センター、1～13頁

秋成雅博　2015「船引地区遺跡群における縄文時代早期の石器の様相」『貝殻文と押型文』平成 26 年度宮崎考古學會研究会資料集、宮崎考古学会県南例会実行委員会、65～80頁

安達厚三　1966「異形部分磨製石器について－美濃，尾張地方発見例を中心として－」『いちのみや考古』第９号、一宮考古学会、４～７頁

上床　真　2006「鹿児島県内出土の「トロトロ石器」に関する覚書」『南九州縄文通信』17、南九州縄文研究会、83 ～ 92 頁
江坂輝彌　1955「茨城県多賀郡刈又坂遺跡」『日本考古学年報』3、日本考古学協会、35 ～ 36 頁・写真
大下　明　2003「今後の「トロトロ石器」研究のために－志賀論文を読んで－」『利根川』24･25､利根川同人、96 ～ 99 頁
岡田　登　1995「鈴木資料紹介（5）阿山・白山両町出土の異形局部磨製石器」『史料』第 137 号、皇學館大學史料編纂所、5 頁
岡村道雄　2009『縄文人の祈りの道具－その形と文様－』日本の美術 No.515、至文堂
岡本東三　1983「トロトロ石器考」『人間・遺跡・遺物』わが考古学論集 1、発掘者談話会、119 ～ 145 頁
片岡　肇　1968「いわゆる異形部分磨製石器の新資料」『古代文化』第 20 巻第 3 号、財団法人古代学協会、66 ～ 67 頁
鎌木義昌　1949「備前黄島貝塚の研究」『吉備考古』77、吉備考古学会、19 ～ 42 頁
川崎　保　2003「第 2 節　山の神遺跡の異形部分磨製石器について」『国営アルプスあづみの公園埋蔵文化財発掘調査報告書 2 －大町市内その 1 －　山の神遺跡』財団法人長野県文化振興事業団・長野県埋蔵文化財センター、300 ～ 305 頁
川崎　保　2007「異形部分磨製石器の分布の意味－「西南日本中央文化伝播帯」の提唱－」『列島の考古学Ⅱ』、渡辺誠先生古稀記念論文集刊行会、285 ～ 292 頁
川道　寛・古澤義久　2012「長崎県における縄文時代精神文化遺物の様相」『研究紀要』第 2 号、長崎県埋蔵文化財センター、1 ～ 24 頁
木﨑康弘　1995「男性器形石製品とトロトロ石器のただならぬ関係について－トロトロ石器の性格を考える－」『人間・遺跡・遺物 3』麻生優先生退官記念論文集、発掘者談話会、300 ～ 311 頁
木野本和之・新田智子　1997「宮川村神滝遺跡出土の異形局部磨製石器について」『研究紀要』第 6 号、三重県埋蔵文化財センター、81 ～ 94 頁
九州縄文研究会・南九州縄文研究会　2012『縄文時代における九州の精神文化』第 22 回九州縄文研究会鹿児島大会発表要旨・資料集
久保田健太郎　2012「異形石器研究の一視点」『季刊考古学』第 119 号､特集 縄文石器が語る文化と社会；東北･関東・中部の縄文石器，流通，製作技術、雄山閣、41 ～ 45 頁
栗山一夫　1935「播磨加古川流域に築造されたる古墳及び通物調査報告（續篇 3)」『人類學雜誌』第 50 巻第 5 号、日本人類学会、183 ～ 192 頁
斎藤基生　1995「（書評）沢田伊一郎著 考古学フォーラム 6「縄文文化 呪術世界の系譜（1）－縄文儀礼と異形部分磨製石器－」」『考古学フォーラム』7、考古学フォーラム、59 ～ 63 頁
斎藤基生　1996「（書評）橋詰佳治著「縄文時代の出産－御物石器と異形部分磨製石器－」「縄文時代の出産（Ⅱ）古墳の造形－その謎」」『美濃の考古学』創刊号、美濃の考古学刊行会、133 ～ 140 頁
寒川朋枝　2013「鹿児島県内出土のトロトロ石器について：使用痕分析の視点から」『私の考古学　丹羽佑一先生退任記念論文集』、丹羽佑一先生退任記念論文集編集委員会、47 ～ 64 頁
沢田伊一郎　1995「縄文文化 呪術世界の系譜（1）－縄文儀礼と異形部分磨製石器－」『考古学フォーラム』6、考古学フォーラム、15 ～ 32 頁
志賀智史　2003「トロトロ石器の色と形－狭間谷遺跡採集トロトロ石器の観察から－」『利根川』24・25、利根川同人、88 ～ 95 頁
新東晃一　2011「南九州の異形石器」『南九州縄文通信』21、南九州縄文研究会、29 ～ 51 頁
鈴木道之助・石橋宏克・宇井義典　2001「千葉県内出土のトロトロ石器」『千葉県史研究』第 9 号、千葉県、73 ～ 78（65 ～ 70）頁
高松龍暉　1986「〈研究ノート〉但馬の異形石器について」『但馬考古学』第 3 集、但馬考古学研究会、8 ～ 18 頁
高山考古学研究会　1984「飛騨の考古学遺物集成（3）－異形部分磨製石器特集－」『岐阜県考古』第 9 号、岐阜考古学会、15～25頁
多田　仁　1998「第 1 節 石器について」『保内町の遺跡　遺跡詳細分布調査報告書』、保内町教育委員会、76 ～ 81 頁

田部剛士　2002「縄文時代草創期・早期の石材利用」『第４回関西縄文文化研究会 縄文時代の石器－関西の縄文時代草創期・早期－』、関西縄文文化研究会、74 ～ 84 頁
津田守一　1976「神滝遺跡出土の異形局部磨製石器について」『歩跡』第３号、皇学館大学考古学研究室、50 ～ 53,68,73 頁
土肥　孝　2011「縄文文化論 異形局部磨製石器について」『月刊 考古学ジャーナル』No.609、ニューサイエンス社、33 ～ 36 頁
橋詰佳治　1993「縄文時代の出産－御物石器と異形部分磨製石器－」『濃飛の文化財』33、岐阜県文化財保護協会、65 ～ 69 頁
林　潤也　2009「北部九州出土のトロトロ石器」『南九州縄文通信』20、南の縄文・地域文化論考－新東晃一代表還暦記念論文集－上巻、南九州縄文研究会、149 ～ 161 頁
林　充彦　2000「（資料紹介）大平村西方遺跡出土の「トロトロ石器」」『九州旧石器』第4号、橘昌信先生還暦記念特別号、九州旧石器文化研究会、354 頁
日高優子　2012「宮崎県の精神文化関連遺物」『縄文時代における九州の精神文化』第 22 回九州縄文研究会鹿児島大会発表要旨・資料集、九州縄文研究会・南九州縄文研究会、210 ～ 211 頁
前田敬彦　2012「和歌山県出土のトロトロ石器」『紀伊考古学研究』15、紀伊考古学研究会、19 ～ 30 頁
馬籠亮道　1999「南九州縄文時代早期の土器文化圏と石鏃石材の選択傾向」『南九州縄文通信』13、南九州縄文研究会、51～65頁
麻柄一志　2006「北陸地方のトロトロ石器」『大鏡』26、富山考古学会、81 ～ 92 頁
町田勝則　2020「大町市山の神遺跡出土の異形部分磨製石器をめぐって－考古学的観察を行って－」『長野県考古学会誌』159、長野県考古学会、11 ～ 37 頁
八木奘三郎　1893「本邦發見石鏃形状の分類」『東京人類學會雑誌』第 9 巻第 93 号、日本人類学会、119 ～ 121 頁 , 石鏃形状分類図
柳田裕三　2003「五ヶ瀬川流域の考古資料（その 1）－延岡市小野昭治氏のコレクション－」『九州縄文時代早期研究ノート』第 1 号、九州縄文時代早期研究会、52 ～ 53 頁
吉田英敏　1976「中濃地方における異形部分磨製石器－津保川流域の分布－」『岐阜県考古』５号、岐阜県考古学会、20 ～ 31 頁
吉田英敏　1979「中濃地方における異形部分磨製石器 PART Ⅱ－長良川中流域の分布を中心に－」『岐阜県考古』7 号、岐阜県考古学会、8 ～ 21 頁
吉朝則富　1992「異形部分磨製石器の新資料」『どっこいし』第 39 号、飛騨考古学会、5 頁
吉朝則富　1992「異形石器考」『どっこいし』第 42 号、飛騨考古学会、8 ～ 12 頁
吉朝則富　2003「異形部分磨製石器について（1）」『どっこいし』第 73 号、飛騨考古学会、6 ～ 11 頁
吉朝則富　2004「異形部分磨製石器について（2）」『どっこいし』第 76 号、飛騨考古学会、10 ～ 12 頁
吉朝則富　2006「異形部分磨製石器について（3）」『どっこいし』第 81 号、飛騨考古学会、11 ～ 12 頁
吉朝則富　2007「異形部分磨製石器について（4）」『どっこいし』第 86 号、飛騨考古学会、10 ～ 13 頁
吉朝則富　2007「トロトロ石器の新資料」『どっこいし』第 86 号、飛騨考古学会、13 頁
若林勝邦　1892「日向ニモ亦石器時代ノ痕跡アリ」『東京人類學會雑誌』第 7 巻第 71 号、日本人類学会、150 ～ 156 頁
和田秀寿　1989「押型文土器文化期における特殊石器の一様相」『龍谷史壇』第 93・94 号、日野博士華甲記念特集、龍谷大学史学会、147 ～ 172 頁
和根崎　剛　2001「真田町傍陽・入軽井沢出土の「トロトロ石器」」『長野県考古学会誌』93・94、長野県考古学会、93 ～ 96 頁

【 宮崎県外 トロトロ石器関係 発掘調査報告書（本稿で取り上げ分のみ）】

麻生　優 編著　1985『泉福寺洞穴の発掘記録』築地書館
有明町教育委員会　2005『横堀遺跡』有明町埋蔵文化財発掘調査報告書（8）
伊万里市教育委員会　1998『樽浦遺跡』伊万里市文化財報告書第 45 集
大分県教育庁埋蔵文化財センター　2016『森の木遺跡発掘調査報告書』大分県教育庁埋蔵文化財センター調査報告書第 88 集

大根占町教育委員会　1999『横高尾遺跡』大根占町埋蔵文化財発掘調査報告書（13）
鹿児島県教育委員会　1978『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告書Ⅱ』
鹿児島県立埋蔵文化財センター　2001『上野原遺跡（第 10 地点）』鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（28）／ 2002『上野原遺跡（第 2 ～ 7 地点）』（41）／ 2005『瀬戸頭（A･B･C）遺跡』（85）
鹿屋市教育委員会　1988『打馬平原遺跡』鹿屋市埋蔵文化財発掘調査報告書（8）
唐津市教育委員会　1996『竹木場前田遺跡（2）』唐津市文化財調査報告書第 71 集
熊本県教育委員会　1995『無田原遺跡』熊本県文化財調査報告第 148 集／ 2000『灰塚遺跡（Ⅰ）』第 187 集／ 2014『瀬田狐塚遺跡』第 296 集
瀬田裏遺跡調査団　1992『瀬田裏遺跡調査資料　Ⅱ』･『瀬田裏遺跡調査報告　Ⅱ』大津町文化財調査報告
竹田市教育委員会　2010『菅生台地と周辺の遺跡ⅩⅧ ヤトコロ遺跡』
西之表市教育委員会　2022『下之平遺跡』
松山町教育委員会　2005『山ノ田遺跡』松山町埋蔵文化財発掘調査報告書（14）

【 宮崎県内 トロトロ石器関係 発掘調査報告書 】
清武町教育委員会　2004『白ヶ野第 1･第 4 遺跡』清武町埋蔵文化財調査報告書第 13 集／ 2005『坂元遺跡』第 15 集／ 2009『清武上猪ノ原遺跡－ 2 －』第 26 集／ 2010『下猪ノ原遺跡第一地区』第 29 集
小林市教育委員会　2011『二原遺跡 1 区・2 区　宮地遺跡 1 区　宮地遺跡 2 区　奈佐木城跡』小林市文化財調査報告書第 6 集
新富町教育委員会　1986『新田原遺跡 瀬戸口遺跡 蔵園地下式横穴墓』新富町文化財調査報告書第 4 集
高千穂町教育委員会　1983『高千穂町遺跡詳細分布調査報告書（三田井・押方・向山地区）』
田野町教育委員会　1986『芳ヶ迫第 1 遺跡 芳ヶ迫第 2 遺跡 芳ヶ迫第 3 遺跡 札ノ元遺跡』田野町文化財調査報告書第 3 集／ 2002『鹿村野地区遺跡』第 47 集
野尻町教育委員会　1990『新村遺跡・高山遺跡・東城原第 1・2・3 遺跡・紙屋城址遺跡』野尻町文化財調査報告書第 4 集／ 1992『天ヶ谷遺跡』第 5 集
日向市教育委員会　2007『仲野原遺跡』／ 2017『上の原遺跡』
都城市　2006「堂山遺跡〈南地区〉」『都城市史』資料編・考古、都城市史編さん委員会
都城市教育委員会　2010『萩ヶ久保第 1 遺跡』都城市文化財調査報告書第 97 集
宮崎県教育委員会　1995『打扇遺跡 早日渡遺跡 矢野原遺跡 蔵田遺跡』
宮崎県埋蔵文化財センター　1997『尾平・楢原遺跡 楢原遺跡』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第 8 集／ 2000a『白ヶ野第 3 遺跡 B 地区』第 25 集／ 2000b『竹ノ内遺跡』第 27 集／ 2001a『権現原第 2 遺跡・杉木原遺跡・永ノ原遺跡』第 33 集／ 2001b『木脇遺跡（旧石器時代～弥生時代編）』第 43 集／ 2002a『白ヶ野第 2・第 3 遺跡（第 1 分冊 縄文時代草創期・早期編）』第 52 集／ 2002b『白ヶ野第 2・3 遺跡（第 2 分冊　縄文前期～中・近世編）・上の原第 1 遺跡（B 地区）』第 62 集／ 2003a『布平遺跡・古城遺跡』第 74 集／ 2003b『五ヶ村遺跡・大野原遺跡』第 75 集／ 2003 c『北牛牧第 5 遺跡・銀座第 3A 遺跡』第 80 集／ 2004『野首第 1 遺跡』第 86 集／ 2007『野首第 1 遺跡Ⅱ』第 157 集／ 2009『尾花 A 遺跡Ⅰ（旧石器時代～縄文時代編）』第 185 集／ 2011『野地久保畠遺跡・森ノ上遺跡』第 196 集／ 2012a『岡遺跡（第 6・7 次調査）・坂元第 2 遺跡』第 212 集／ 2012b『俵石第 1 遺跡（第 2 次調査）・俵石第 2 遺跡』第 216 集／ 2013『岡遺跡（第 9・13・15 次調査）』第 223 集／ 2014『駄小屋遺跡』第 233 集／ 2016『中床丸遺跡』第 239 集／ 2021『保木島遺跡』第 258 集／ 2023『上平遺跡』第 265 集
宮崎市教育委員会　1992『西ノ原第 2 遺跡』／ 1997『車坂・山下遺跡群　車坂第 1・2・3 遺跡 山下第 1・2・3 遺跡』／ 2008『橋山第 2 遺跡』宮崎市埋蔵文化財調査報告書第 73 集／2011『下猪ノ原遺跡第二地区』第 83 集／ 2012『清武上猪ノ原遺跡－ 4 －』第 88 集／ 2018『清武上猪ノ原遺跡第 5 地区』第 119 集

図出典

図１・７・10：初出、藤木作成
図２：20 の写真は柳田裕三提供、１・２・25は新規図化、22は再実測、他は発掘調査報告書等から一部改変の上で転載
図３：28・29 は裏面を追加作図、32 は再実測、他は発掘調査報告書等から一部改変の上で転載
図４～６：発掘調査報告書等から一部改変の上で転載
図７：初出、藤木作成
図８：志賀 2003 より一部改変の上で転載
図９：藤木撮影
図 10：初出、藤木作成
図 11：初出、藤木作成、遺物実測図は発掘調査報告書等から一部改変の上で転載